混迷の時代を抜け出すために

青柿 良一

とどまるところを知らないかのような株価の下落，国内政治経済の混乱は，景気の冷え込みとも重なって，いままで培ってきた日本国民の自信を一気に無くす方向に向かっている状況となっています。

このような中で，本電気化学会はナノテクやバイオ，環境といった分野をはじめとして，特に各種燃料電池の開発に対して高まる期待の中で，比較的順調に発展しているように思われます。しかしながらひるがえってみますと，本会も戦前戦後にかけての電力増産と歩調をあわせた電気化学工業の勃興期を経て，オイルショックに始まる電力価格の急激な高騰にともなう不況の中で，時には「死に至る電気化学」などとささやかれるまでに，将来的な展望を見出せない時期を経験してきました。

実際，後になってみれば何事も筋道を立てた議論が可能ですが，困難な状況の真っ只中にいる場合には，すべての人にとって未来は悲観的に見え，どのように対処したらよいかわからずに右往左往してしまいがちです。最近読んだ本の中で印象に残ったもののひとつに，南極大陸横断を企てたシャクルトンに関するものがあります。その中で，頼みの綱の船は氷の下に没し，外界と完全に孤立した氷盤の上に20数名の乗組員とともに取り残された状態で，彼は全員を一人残らず安全に脱出させるべく，決死の行動にでます。その時にリーダーとして彼は，困難に打ち勝つ不屈の自信とそれを裏付ける積極的な行動，そのための強じんな精神力と体力が必要だと言っています。

政治経済のみならず，産業の基盤自体ゆらいでいるように見える現在，従来はわが国の自信となっていた部分がぐらつくとともに，我々国民は一億自信喪失状態を呈しているように見えます。本会は過去に極めてきびしい「自信喪失」状態を経験して自己改革をすすめ，次の新しい目標をつかんできた歴史をもっています。このような確固たる自信のもとで，たとえば「燃料電池」というキーワードを取り上げてみると，そこには情報端末の新エネルギー，新しい分散型発電システム，そして未来の電気自動車といった新しい産業基盤を構築する輝かしい未来があふれています。本会関東支部におきましても，このような希望と自信のもとで本会の使命をはたすべく，会員みなさまに現在の果てしないデフレスパイラルからの脱出をかけた活発な活動と呼びかけております。そのためには個々の会員のみならず，学会としての強い意志と体力を必要とするのはもちろんです。小生も微力ながらいささかなりとも本会活動のお役に立ちたいと思っています。

Ryoichi AOGAKI

平成 13, 14 年度関東支部長
職業能力開発総合大学校
造形工学科教授